

石川達三

風にそよぐ葎

石川達三
風にそよぐ葦

新潮社版

風^{かぜ}にそよぐ葦^{あし}

石川達三作品集第六卷

昭和四十八年九月二十五日 発行
昭和五十一年一月十五日 三刷

定価 一〇〇〇円

著者 石^{いし}川^{かわ}達^{ちやう}三^{ぞう}

発行者 佐藤亮一

発行所 株式會社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一(一六二)

電話 業務部(〇三)二六六一五一一

編輯部(〇三)二六六一五四一一

振替 東京 四一八〇八番

印刷 大日本印刷株式會社

製本 加藤製本株式會社

装画 下田義寛

© by Tatsuzo Ishikawa 1973 Tokyo

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

風にそよぐ葦

解題

久保田正文

581

5

風
に
そ
よ
ぐ
葦^{あし}

風
に
そ
よ
ぐ
葦^{あし}

1

外務省の正門の、大きな鉄格子がとりはずされてあった。正午にかい烈日の照りかえるなかで、七、八人の人夫が汗を流しながら、その扉をトラックの上に押しあげようとして騒いでいた。

ひろびろと殺風景になった門柱のあいだを通過して清原節雄は街に出た。正午に東京会館で葦沢と会う予定である。街路には枳の木の並木がずっと桜田門までつづいていて、青い陰が歩道に落ちてゐる。その陰を辿りながら歩いていった。歩きながら、何だか嫌な気が

ハル国務長官との間でこの春から続けられ
映は、いま完全に停頓している。三国同盟

と大陸からの撤兵問題とで暗礁に乗りあげ、二進も三進も行かなくなってしまった。そのときになって日本の外務省が門扉を取りはずしたのだ。何か不吉な予感がある。アメリカ局長にその理由をきいて見たところが、彼は皮肉な笑いを浅らして、

「大砲の弾丸を二、三十発こしらえるんですよ」と言った。

一週間まえに「金属回収令」という閣令が公布された。四年に互に日華事変のために鉄も銅も足りなくなったのだ。あらゆる家庭とあらゆる事務所の、門扉や暖房器具や窓格子や花瓶や傘立てを鋳つぶして、それを支那大陸の山の中に叩きこもうという策略だ。

それほど金属の足りないというのに、陸軍はまだこのうえ新しい戦争をはじめようとしている。北九州のささやかな石炭と新潟の石油と、家庭から取りあげた鉄瓶や傘立てとで、米国と英国とを屈伏させようというのだ。

歩道をぶらぶらと歩きながら、彼は年甲斐もなく腹が立ってきた。英国に三年、米国を七年もあるき廻ってきた彼は、サン・ビードロ、ロングビーチのあたりに林立する石油井戸も知っている。パーミンガム、マンチエスターあたりの鉄と石炭も見てきた。戦争資源をくらべたら、一対百だ。

一昨日、宮中で御前会議があった。そのことについて、昨日も今日も新聞は一行の記事をも書かず、ラジオ・ニュースも報道されなかった。清原節雄は外務大臣に会ってみるつもりだったが、彼はまだ来ていなかった。そしてアメリカ局長はまるで何も知らないのだった。

「御前會議があったことは知っています。しかしその内容については何も聞いていませんね。どんな會議だったんですか」

呆れた話だ。対米外交の重大な転機を、アメリカ局長さえもまだ知らされていなかったのだ。況や一億の国民、誰ひとりとして知りはない。知らないうちに戦争の危機はちかづきつつある。被害を受けるのは彼等だ。しかも彼等に何の発言権もなく、反抗する自由も与えられてはいない。

桜田門の角をまがると濠端の風が吹いてくる。公園の樹木の茂みに沿うた涼しい日陰の道を彼はゆったりと歩いて行つた。やや汚れた白服、型の崩れたバナマ帽子、穴のあいた靴をもち、ポケットには外国雑誌を二冊も押しこんで、風采は一向にかまわない。十年の外国生活の名残らしい瀟洒たる匂いはどこにも感じられなかったが、外交評論家としての彼の存在は、近衛内閣の対米政策を、閣外に在って支えている一本の柱であった。

日比谷交叉点の濠端には、正午の休み時間に近所の事務所から出てきた勤め人や女事務員が群れになって、お濠の鯉をながめていた。数十匹の大きな鯉は投げこまれる餌を争うて魚紋をえがき、見物の人たちは肥った鯉の腹に食欲を感じている。両方とも食欲だ。

清原節雄はその群れをぬけてお濠の岸を丸之内の方へ歩いて行つた。遠からず政変があるだろうと彼は思っていた。近衛もやりにくかったに違いない。外務省には松岡外交の余燼が今もなお残っていて、近衛、豊田の外交方針を喜ばない感情がある。

松岡は陸、海軍と手を握っていた。閣議における外務大臣の意見は陸、海軍の要求をも代表していたから、近衛はいつも発言を封じられていた。第二次内閣を組織した直後から、松岡はまず三国同盟を結び、アンリ大使と交渉して北部仏印への進駐を遂げ、タイと仏印との紛争に乗りだし、ドイツへ行つてヒトラーと会い、最後には南部仏印進駐への道をつけた。この六月の末に陸、海軍の首脳部は進駐計画をもつて松岡をたずね、日仏共同防衛協定の締結を求めたのだった。外務大臣はそのとき、「仏印南部に進駐すれば世界戦争がおこり、陸、海軍はシンガポールまで攻めなくてはならなくなるが、それでも宜しいか」と一本釘をさして置いてから、七月二日の御前會議にこの提案を持ちだした。

近衛は絶対反対だった。しかも彼は陸、海軍の押しの強さに負けてしまったのだ。彼が松岡洋右と手を切ろうと決心したのはこの時だった。

それでも彼はなお諦めかねた。そして十二日の朝、外

務省にむかつて、

「もしも南部仏印に進駐すれば日米会談はどうなるのか」と気の弱い反問を發した。

松岡の腹心である南洋局長齋藤寅次は、総理からの質問を受けとるとすぐ、間髪を容れずヴィシーにいる加藤外松大使に宛てて電報を打たせてしまった。日仏交渉がはじまった。

それから三日目、近衛は覚悟をきめて閣僚の辞表を取りまとめ、最後に書記官長が病氣静養中の松岡のところへ行った。

「この通り全閣僚の辞表をまとめましたから、外務大臣にも一つ御署名をお願いしたいのです」

有無を言わせない処置だった。それがせめてもの近衛の復讐であつたのだ。松岡は黙って署名をし、書記官長を帰してからやにわに床の上に起きあがると、枕をとって部屋の障子に叩きつけた。障子の骨が折れて枕は外の廊下にころがった。

「近衛が、近衛が……」と彼は叫んだものだった。「あいつが、日本の国運をあやまるんだ！」

翌日、六命は再降下して第三次近衛内閣が成立した。ただひたすらに日米会談を妥結させんがための組閣であつた。しかし松岡が残した共同防衛協定は僅か十日の

ちに締結され、日本軍は南部仏印にむかつて雪崩のように押しわたつて行つた。そして日本資産は世界各地で凍結され、日米会談は停頓してしまつた。

その結果が一昨日の御前会議である。近衛は落胆してゐるに違ひない。外務省の鉄門はとりはずすのが当然かも知れない。もはや外務省の權威は陸軍の手に奪い去られてしまつたのだ。

清原節雄は濠端をあるいて東京會館の玄関にはいつて行つた。建物の中はほの暗く、冷えびえとしていた。白服のボーイが近づいてきて、

「葦沢さんがお待ちになつておられます」と彼に告げた。

午前十時に葦沢悠平は家を出た。それまでは何事もなかった。

出るときに妻にむかつて、

「今日は月曜だから、清原君に会ふ筈だが、用はないか」と言つた。妻は清原節雄の妹である。

「そうですね」と茂子夫人は考えた。「別に用事つてありませんけど、何ですか近ごろの世のなかの動きが兄さんの意見と違ふでしょう。兄さんは一本氣で融通が利かないから、少し心配ですわ。そういつて置いて下さい」

そのくらいの心配なら誰でも持っている筈だった。別に気にもとめずには彼は外へ出た。ガソリン重点使用規則という制度が実施されてから、彼の自動車は使いものにならなくなつて、車庫のなかで錆びついていた。

電車は海の見える高架線のうえを通り、鳩の群れが輪をえがいて飛んでいる新聞社の高い建物と建物とのあいだを抜けて、東京駅のフォームにはいった。

葦沢社長は新聞をたたんで右手に持ち、左の腕に篠のステッキをかけてゆつたりと駅の階段を降りて行った。五十を幾つかすぎた丈の高いからだに純白の麻の服を着てパナマ帽子をかぶり、やや長目に刈つた半白の髪が美しく、匂うばかりに清潔な紳士である。オックスフォードで三年の学生生活を送つた、その当時の教養が今になつて身について来たという姿である。

駅前の広場は朝の強い日光に満ちていて、残暑は真夏ほどにきびしかった。鈴懸の葉の茂つた下を彼は急がずに横切つて行った。群衆の波が流れては絶え、絶えてはまた続く。高い建物にかこまれたこの広場の風景はもう幾年のあいだ些かの變化もなかったように思われる。しかもその中に移り変わる時代の色が少しづつ加えられていた。仔細に注意して見るならば四力年に互る（日華事変）に苦しんでいる日本の姿が、縮図となつてこの広場

の到るところに見られるのであった。

高い建物の屋上から垂らした白布には大きな文字で“大政翼賛”と書いてある。“臣道実践”と書いてある。

日の丸の旗をかかげた下には“聖戦完遂”と書いてある。その四角張つた文字のかけに苦悶する国家の表情が歪んでいる。

国旗や団旗をかかげた群衆が列をなして宮城の方に向かって行進して行った。先頭のあたりから喇叭の音がきこえる。広場を横切つて毎日の勤めにかよう人たちの半数はカーキ色の国民服を着て、兵隊まがいの戦闘帽をかぶつていた。昭和十五年十一月、政府は国民服令なるものを公布して一億の人民に制服を着せようとした。そのカーキ色の服を着ると同時に、彼等はその心にまでも制服を着てしまつたのだ。

葦沢悠平は制服を着ない。白麻の夏服は身だしなみであると同時に、彼の自由なる心の象徴でもあった。ビルディングにはいり、扉を開いていたエレベーターに乗る。五人の男が先に乗っていた。彼が入ると同時にその中の二人が、不思議な光をもつた眼で彼の顔を盗み見た。この暑さに二人とも灰色の背広を着てきちんとネクタイを結んでいた。そのまま黙っている。箱は上昇しはじめた。彼の胸に一種の直感がきた。私服の特高刑事である。

四階まで来て三人は降りた。残っているのは例の二人と彼とだけだ。五階。彼等は身じろぎもしない。社長もまたステッキを杖に冷然と向いあつていた。

箱は再び上昇しはじめた。特高刑事に襲われる可能性は十分にある。彼が主宰している綜合雑誌「新評論」に対して、憲兵隊と警察とは常に監視の眼を光らせているのだ。自由主義的だからいけないというのである。六階。……

葦沢社長はエレベーターを出て歩きはじめた。果して彼のうしろから二人の足音がついて来る。かすかに頬の肉がこわばるのが感じられた。……この四年のあいだ、どれほど軍部や官僚のわからず屋共に妥協して来たことか。自分の自由主義が彼等から非難される理由はない。仄暗い廊下に三人の足音が堅くひびいた。うしろの二人は一跳びで彼の肩に飛びつけるほどの距離を、どこまでもついて来る。

金文字のはいった厚い硝子の扉のまえを幾つか通りすぎる。東山炭鋳株式会社、東京宣伝美術研究会、共同精機株式会社、弁護士内村岩雄法律事務所。……彼はどこまでも同じ步調で歩いて行った。見苦しい姿は見せたくない。二つの角を曲って、事務所は左側の三つ目の扉だ。ふと彼は、特高刑事を案内しているような腹立たしさを

感じた。

「新評論社」と金文字のはいった扉に手をかけて静かに押した。聴覚が鋭敏にはたらく。彼の耳は彼の背後を黙って通りすぎて行く二人の足音を聞いた。ふり向きもせずに彼はうしろ手に扉を閉ざす。足音は廊下に反響しながら次第に遠ざかつて行った。一瞬間、頭の上っていた血液が爽やかに流れ下るのを感じた。

社長室は建物の角になった白い部屋で、四つの窓から吹きこむ大空の風が涼しくカアテンをふくらましている。女秘書にステッキと帽子をわたし、彼はさつと上着をぬいだ。翡翠のはいった金のカフス釦が青々と光る。

「さきほど清原先生からお電話がございました……」

「うむ」

「正午に東京会館へおいでになるそうです」

「ああそう」

「それから岡部さんがお待ちになっていました」

「うん、呼んでくれ給え」

葦沢社長は窓に立つてワイシャツの背に風を受けながら煙草を啜えた。かすかに、特高刑事に怯えた今しがたの自分に腹が立っていた。誰を恐れる必要があるものか……ところが事実は恐れなくてはならない奇怪な世の中であつた。戦争が続けばつづくほど、一層おそろしい世

の中になって行くだろう。今日は刑事の襲撃をのがれた。しかしいつかはあの二人が本当にこの部屋へ闖入して来るに違いない。悪い予感だ。

扉をノックして岡部編集長が姿を見せた。小肥りの艶艶した頬から少し禿げあがつた明るい額まで、良い血色をしている。無遠慮な大股ではいつて来るといきなり、「社長、またやられました」と早口に言った。

「さっき陸軍報道部から電話で編集長にすぐ来いと言っています。今から行って叱られて来ます。九月号の清原さんの原稿のことだと思いませんか」

「ふむ。またか、……御苦労だね。何とか一つうまく話をして来たまえ」

清原節雄の論説は立派なものだった。それだけに軍部は嫌がるのだ。今朝家を出るときに妻が清原の一本氣を心配していたが、やはり予感があたったのだ。

岡部編集長はニュースに対して敏感な性質をもっていた。彼はあらゆる事件に関して裏面の消息を知っている。それが傲慢なのだ。事件の裏から裏をたどって行くことによって彼は一つの特異な見解をつくり上げていた。流言飛語は彼にとって重要な意味をもっている。

半袖の白いシャツから剃き出しになっている太い腕を胸の前に組みあわせ、椅子の腕木に腰をかけると例の早

口でしゃべり始めた。

「清原先生の、南部進駐と対米外交、あの論説で見ますと進駐は対米戦争の準備だというんですが、僕は軍部の謀略じゃないかと思うんです。その前に対ソ戦争がはじまりますよ。東部戦線でドイツはぐんぐん押していますからね。日本はこの機会を利用するでしょうね。一挙にソ連を始末して置いて、それから南方作戦をゆっくりやるつもりだと思いませんか」

「ふむ、そうかね」

「そうですよ。今年の六月ごろから北滿に集結している部隊の数はおびただしいものです。ちかごろ内地で召集を受けた者の四割までは、入隊と同時に満洲へ連れて行かれています。それからですね、八月末に朝鮮から帰って来た友人の話ですと、京城の飛行場を経て北へ行く飛行機は毎日三十機を下らんと言っています。朝鮮の東海岸の清津と羅津、あそこに素晴らしい飛行場ができています。陸軍は開戦と同時に、ウラジオの軍備を半日で壊滅させて見せると豪語しているそうですね。それからですね、僕の郷里の鹿児島から最近出て行った部隊はみな冬服を持たされて行ったという事実もあるんです。面白いですなあ」

「ほう、そうかね」と社長はうなずいた。うなずきなが

ら、信じてはいなかった。

「まあ、一つ行ってみます。大したことはないでしょう」と立ちあがると、岡部熊雄は忙しそうに出て行った。

元氣な、潑刺とした男であった。働くことが好きで、少年のように移り氣だ。政治や軍事のからくりを手品のように巧みに解きほごして見せる。しかしながら彼の本当の心は傍觀者であった。彼は戦争に加担するのでもなく、反対するのでもない。事件が拡大され複雑化すれば、彼は興奮する。戦争のスリルが彼を夢中にさせるのだ。戦争は彼にとって、この上もなく面白いスポーツであった。そして彼の予想が中ろうと外れようと、彼は少しも責任を感じはしない。

戦争がどうなろうと、国民生活がどんなに悲惨になろうと、彼の心に愛いはない。流言飛語を聞きあさり、外交交渉の紛糾に興奮しながら、実は全く孤独なのだ。彼はどんな思想にも心から共鳴はしないし、団体にも加入しない。徹底的に傍觀する、孤独な明るい人格であった。そして彼のような傍觀者がどうかすると鋭い批判をもった真の愛國者のように見えていたのである。

彼に比べれば葦沢社長はほとんど何事をも語らない人物であった。いつも変らぬ静かな表情をたもっていて、取り澄ました貴族主義者を思わせた。言葉はおだやかで、

落ちつき払った態度を装っているように見える。彼こそは戦争に対しても國家に対しても傍觀者であるように思われた。その冷然たる態度が、軍報道部や特高警察から白い眼で見られる一つの原因にもなっていた。

岡部熊雄は彼の女婿である。

毎週の月曜日に会って、昼食をたべながら近況を語りあうという習慣は、もう七年もつづいていた。

東京會館のお濠にむいた涼しい小部屋で、二人は軽い食事を注文した。彼等はオックスフォードで三年の学生生活を共にした。三十年來の友人である。清原は妹と一緒に英國に行っていた。留学を終ってから三人で北米にまわり、葦沢はその妹を託されて二人で歸國したが、清原はそれから七年も米國に留まって新聞記者をしていた。悠平が清原の妹と結婚したのは歸國した翌年であった。

留学三年の葦沢悠平は貴族的な瀟灑たる紳士になり、欧米に十年を過した清原節雄は身だしなみを忘れた老書生の姿をしていた。一方は綜合雑誌の社長であり他方は一本のペンに生命を託して自由なる論客となっている。月曜日の食事の時間には葦沢が聞き役で清原が多く弁ずる役目であった。

「昨日の夕方、尾崎君に会ってね」と彼はパンをむしり

ながら言う。

「尾崎秀実？」

「うむ。近衛のどこから帰り道に寄ってくれたんだ。その時の話が心配になって、今朝は外務省へ廻って見たんだが、日米会談は近いうちに破綻を来たすね」

「どうもそうではないかと僕も思つてはいたがね」と社長は首をかしげた。

「土曜日に御前会議があつたんだ」と清原は皿の上の肉を切りながら言う。「その会議というのが始めから陸軍の計画したものだった。九月一日に馬淵報道部長が放送演説をやつたね。例の『ぐずぐず』していると日本はじり貧に陥る。実力に訴えても対日包圍陣を突破して云々」という、いわゆるじり貧演説だ。あの時から僕は予感があつた。御前会議に於ける東条の言い分もそれだった。近衛にむかつて、日米会談をこれ以上引っぱられては困るから期限を切れと言つたんだ。ということとはだね、第三次近衛内閣の使命は終つたものと認めたのだよ。いわば近衛に辞職をせまつたということだよ」

「思いあがつるようだね」

「思いあがつてるさ！馬淵はじり貧だという。そのじり貧に陥るような資料しなくて、英米連合軍を相手にしてやれる道理がない。軍人は二た言日には（国運を賭

して）と言うが、冗談じゃないよ。そんな軽率に国運を賭されてはたまつたもんじゃないからね」

「ふむ、それで尾崎君は何と言うんだ」

「近衛がね、もう自分の力で戦争を防止することは出来なくなつたと言つたそうだ。彼が匙を投げたら、もう誰も陸軍に楯ついて火中の栗を拾うものはないよ」

また新しい戦争が始まる。……葦沢にはこの友人の見解が信じられた。そして彼自身の置かれている現在の立場が、次第に困難を加えてくることが予想された。悪い予感がある。いつまで無事に雑誌社をつづけて行かれるだろうか。現に、岡部編集長は軍報道部に呼びつけられているのだ。

ボーイがはいってきて、葦沢社長に自宅から電話がかかつて来ていると告げた。彼はナプキンを食卓の上に置いて廊下へ出て行つた。

しばらくして元の部屋に戻ってきたとき、年齢のせいでやたらんだ彼の頬には微妙な笑いの影が漂うていた。羞恥のようでもあり自嘲のようでもある。永年の友人だけが知っている心と心との響きによって、清原はその笑いの意味を察し得た。自宅に、何か面白くないことがあつたに違いない。

再び悠平が銀のフォークを手にとつたとき、彼は唇を